

# 戦後マラヤの愛国華僑(II)

はら 不 じ お  
原 不 二 夫

はじめに

## I 陳嘉庚の役割と影響力

### II 週刊『風下』

#### 1. 陳嘉庚と胡愈之

#### 2. 中国問題への視点

#### 3. マラヤへの視点

(1) 華僑にとっての中国とマラヤ(以上、前号)

(2) マラヤの政情に対する評価(以下、本号)

(3) マラヤ華人への評価

### III 中国に帰ったマラヤ華僑

むすび

## II 週刊『風下』

### 3. マラヤへの視点

#### (2) マラヤの政情に対する評価

週刊『風下』誌は、マラヤ国内の政治情勢、政治運動に関しては、民主化、自治、民族平等要求支持の論陣をはった。イギリス当局の植民地統治維持、大衆運動抑圧、非マレー人への公民権規制などを批判したものである。たとえば李潤湖「戦後馬來亞的变化与当前危機」〔戦後マラヤの変化と当面の危機〕(『風下』第66期 1947年3月15日)は、華人中心の左翼組織「マラヤ民主同盟」(Malayan Democratic Union, 1945年12月21日結成)を讃えつつ、イギリス労働党政権の「本国では無血社会主義革命、マラヤでは不当な民族差別政策」といった矛盾した政策を批判した。

また胡愈之は、当面は民主憲法要求闘争など合法的、平和的闘争を進めるよう説き(「合法闘争」『風下』第71期 1947年4月19日。もっともここでの

「闘争」の力点は中国の闘争への参加の方に置かれている)、1948年2月1日に発足したマラヤ連邦に対しては、立法議員が官選であること、シンガポールを直轄植民地として切離し、しかもシンガポールの人口90万人中選挙権を2万2000人にしか認めないこと、などをとり上げて、「紙上の民主自治」と批判し(「民主第1課」〔民主々義の第1課〕『風下』第111期 1948年1月31日)、イギリスが自治をひき延ばすならマラヤ各民族人民は堅く団結して民主、自治をかちとろう、と訴えた(「慢々来」〔ゆっくり行こう〕『風下』第112期 1948年2月7日)。

同じマラヤ連邦に対する批判でも、李が華人差別を問題にしているのに対し胡は自治権否認を問題にしていることが目につく。前者はいわば反植民地闘争の具体論、後者は一般論である。相違はマラヤにもつ「根」の深さの違いに根差すかも知れない。ちなみに李は幼時にマラヤに渡り苦学して文芸・評論活動の闘士となったが、日本占領期の逮捕・拷問で受けた精神的・肉体的傷害がもとで、1947年11月25日、30歳余の生涯を閉じた(『風下』同人「悼李潤湖先生」〔李潤湖先生を悼む〕『風下』第103期 1947年11月29日)。

1947年10月の反英統一行動＝全マラヤ・ハルタル(一斉休業)を沈茲九が「各民族人民の覚醒」と讃えたことは本誌前号で見た。『風下』の民主化闘争一般への支援はこれらの論評から明白に読みとれるが、具体的な闘争の担い手に対する評価は意味深長である。

まず華人上層への評価について見る。

「馬華（マレーシア華人——引用者）上層には陳禎祿（Tan Cheng Lock。マラヤ華人公会 MCA の創設者——引用者）、陳嘉庚のような民族資産階級の開明分子もあり、馬華上層・下層間の矛盾はイギリス植民地主義と馬華上層との間の矛盾よりはるかに小さい。馬華上層には中国国民党員もいるが、ここはマラヤであって中国ではない。彼らは（マラヤでの——引用者）利を求めて入党しただけで祖国国民党の独裁に同調して入党したわけではない。彼らは統一戦線の対象たり得る」

との一読者（劉杉上）の投書（『風下』第119期 1948年3月27日）に対し、「金丁」（汪金丁。以下、筆名は「」で記し、必要に応じて本名を付記する）は「利を求めて入党したことこそ、彼らの利益が反動派と一致していることを物語る」と答えている（『風下』同上期）。「金丁」ら『風下』主流にとって、ある華人が敵か否かを選別する基準は、マラヤでの具体的な政治的立場でなく、中国国民党との関係にあったのである。これは、当時のマラヤの政治情勢を判断するうえで柔軟性を失わせる結果になったのではなからうか。

次に、マレー人左翼への評価について見よう。

本誌前号で私がマラヤ化の旗手と評した「馬華」は、マレー人上層の保守勢力・統一マレー国民組織 UMNO（1946年5月結成）を「貴族の指導下に、少数分子の利益のためにマレー民族をだまして売り渡した」と批判する一方、マレー人左翼勢力・マレー国民党（1944年10月結成。「マレー人民連合戦線」の中心勢力として華人左翼と共闘したが、1948年6月、非常事態宣言公布とともに非合法化された）については「情熱的青年、目覚めた大衆の支持の下に、着実に道を切り開いている」と称賛した（「馬來民族的發展」〔馬來民族的發展〕『風下』第100期 1947年11月8日）。「馬華」は『風下』第114期（1948年2月21日）でも、「封建勢力（村長 penghulu, 区長

ketua kampung）・貴族・イギリス植民地勢力を基盤とする UMNO は、真の愛国運動の発生に衝撃を受けている。多くの村でマレー国民党が村長制度廃止、民選、政教（政治と回教）分離を求め始めたのである」（「馬華」〔馬來民族怎樣被統治着〕〔マレー民族はいかに統治されているか〕『風下』第114期 1948年2月21日）とマレー国民党を高く評価している。

ところが、『風下』第32期（1946年7月13日）の林子文「馬來民族与馬來亞連邦」〔マレー民族とマラヤ連合〕は、「マラヤはマレー人のもの」を呼号する貴族勢力=UMNO を批判する一方で、マレー国民党をも、インドネシアとの一体化を目指し「マレー群島のマレー人は総てマラヤ公民」の主張を掲げているとして、「自称左派」と皮肉った。しかしマレー国民党はマラヤ共産党（マ共）の支援下に結成され、当時は即時完全独立に主眼を置いて闘っており、マレー人（特に貴族層）の権利擁護を第1に掲げるマレー人右派とは全く階級的立場を異にしていた。インドネシアとの関係という民族的もしくは人種的視点を階級的視点と混同した結果が、「自称左派」という揶揄につながったのではないか。マレー人の運動を理解していた「馬華」に対し、『風下』主流はマレー人理解にやや欠ける面があったともとれる。

最後に、マラヤにおける当時最大の左翼勢力、マラヤ共産党への評価はどうだったろうか。不思議なことに『風下』には、「マ共が指導する民主化運動、民族解放闘争」といった表現はほとんどない。マ共関係の記事も、先述の実質的合法化への言及の他は、同党青年指導者・林亜亮の死を惜しむ追悼文（『風下』第90期 1947年8月30日、同第91期 9月6日、同第94期 9月27日。林は1944年9月28日に日本の特高に逮捕され、日本軍敗北とともに釈放されたが体はひどく衰弱していた。1946年2月15日にはイ

ギリス当局に逮捕され、47年8月16日に釈放、わずか9日後の25日に死亡したという)のみである。これら追悼文は林の死を「マ共にとって重大な損失であるばかりでなく、全マラヤ500万同胞にとっての損失」としている。

マ共指導者の論稿も、人民抗日軍第4独立隊隊長で陳平書記長の片腕だった陳田がチェコスロバキアでの「世界民主青年大会」出席の際書き送った印象記『風下』第86期 1947年8月2日、同第92期9月13日、同第94期 9月27日、同第95・96期 10月9日、同第104期 12月6日、同第105期 12月13日)のみだった。マ共指導者の多くは、1946年2月15日の反英ストとそれに伴う大量逮捕を契機に潜行していたから、『風下』が弾圧への警戒から、少なくとも表面的にはマ共との関係を断とうとしたことは充分あり得る。しかし、先述のように同年6月4日以降1948年前半までマ共は合法状態にあったのであり、クアラルンプールのマ共系紙『民声報』も48年まで発行を続けている。また『風下』が中共との親密さを誇示していたことはしばしば指摘したとおりである。当時マ共はマラヤの政治体制のあり方をめぐってイギリス当局との対立を深めており、マラヤでの闘争は中国における解放闘争の一環である、との同党の1945、46年頃までの認識は急速に失われつつあった。それはやがて1948年6月18日の非常事態宣言—武装闘争開始へとつながる。中国における解放闘争に主眼をおく『風下』にとって、マ共は次第に異次元的存在になっていったのではなかろうか。

### (3) マラヤ華人への評価

『風下』は政治評論とは別に、華人の性格等について興味ある指摘を行なっている。たとえば胡愈之は、「華僑文化工作者」について、(1)中国文化を知らぬまま至上視し「蕃人」を蔑視、(2)封

建思想、保守思想を改めない、(3)「中国来」(中国生まれの渡南者の新客ともいう)と「パパ」(マラヤ生まれの華人)とが互いに相手を蔑視、(4)「中国学校」では国内(中国国内の意)の標準課程を採用して南洋の生活環境を無視、(5)理性的批判に欠け功利主義に走る(以上「論新學風」[新學風を論ず]『風下』第26期 1946年6月1日)と批判し、「南洋青年」について「現実を重視し、頭脳を使わず理論に弱い」(座談会での発言。『風下』第27期 1946年6月8日)と評した。沈茲九は「一般僑胞」の回教への無理解を批判した(『風下』第106期 1947年12月20日)。

胡はまた、マラヤで通常行なわれている出身地別の華僑分類(福建、広東、客家など10に分れる)を次のように厳しく批判した。

この10分類は、植民地で古くから用いられる格式あるものらしいが、南洋に来たことのない中国人なら笑い出す。中華民族は漢族のほか回族など少数民族から成る。福建省人民を福建、福州、福清、興化、客属等に細分することには、いささかの科学的根拠もない。方言別と言うが、方言はさらに多数に分れる。

中国国内では、中華民族は不可分と思っている。海外の華僑のみ、いまだ帮派・地域観念にとらわれている(「十類中国人」[十類の中国人]『風下』第90期 1947年8月30日)。

胡、沈が指摘した点のうちいくつかについては、その後華人自身の間からも「自己批判」がなされ、根本的な変容が起こった。たとえば今日、華語学校の教育内容は完全にマレーシア化されたし、「中国来」=「新客」の新規流入がないため「中国来」・「パパ」の対立もほとんど意味を失った。ただ、出身地別の対立を解消し方言でなく華語(北京官話)を普及させよう、との声は強いが、分類法まで廃止しようとする動きはない。いずれにせよ胡愈之らの指摘は、マラヤ華人の性格、思考法などに関する限り非常な先見の明をもっていた

と言わざるを得ない。皮肉なことに、胡らがマラヤ華人から遊離した、真の意味の僑居中国人＝一時マラヤに避難した中国人にすぎなかったからこそ、マラヤ華人を客観的に論ずることが可能になり、したがって驚くほどの先見の明を発揮することができたのではなからうか。残念ながらこの先見の明は、マラヤにおけるその後の政治運動とも結びつかなかった。『風下』同人の多くが中国に帰ったからである。

### Ⅲ 中国に帰ったマラヤ華僑

陳嘉庚は、毛沢東に乞われ、新中国建設に参加するため、1950年5月最終的に中国に戻った。胡愈之夫妻も人民共和国成立直前に解放区入りした。他方、イギリス当局と左派勢力との対立激化に伴って、多数の華人が中国に強制送還された。〈付表〉は、いくつかの資料からこれら自発的もしくは強制的帰国者の名を捜し出し、その後の中国での役職を追ったものである。

自発的帰国組のなかのその他の「大物」は莊希泉、莊明理で、いずれも陳嘉庚にきわめて近く、前者は1911年の辛亥革命以来の(註1)、後者は30年代の抗日運動を通じての(註2)、陳の友人である。莊希泉が1921年に一旦追放されたのは、イギリス当局の華語学校規制に対して反対運動を組織したため、彼は以後ずっと中国での解放闘争に参加した。戦後再びシンガポールに戻って陳に帰国を勧め、自身も陳と相前後して帰国した。莊明理も1940年に籌賑会ペナン支部責任者としての活動が原因で追放処分を受け、以後中国で、南洋各地から中国支援に馳せ参じた「機工」(運転手、技師など)の受け入れ活動にたずさわった。戦後の1946年に再びペナンに戻り、籌賑会役員として機工の

順調なマラヤ復帰に手を尽くす一方、新聞発行にもたずさわった。莊希泉と同じく、革命達成に前後して最終帰国した。

強制送還組の代表的人物は洪糸糸で、彼は胡愈之帰国後の『南僑日報』『南僑晩報』両紙編集長だった。両紙は、非常事態下の緊急法令をファッシュ法令と批判し、アメリカ帝国主義の朝鮮侵略を指弾し、1950年9月のストックホルム平和宣言と平和運動とを支持したことなどのため、イギリス当局の不興をかかっており、ついに1950年9月20日、両紙停刊、洪ほか2名(彭友真、呉西冷)逮捕、追放となったものである(註3)。

〈付表〉から、次の点が指摘できる。第1に、マラヤ関係華僑が全国帰国華僑聯合会(僑聯)の中枢を占めたこと、第2に、マラヤ華僑に関する限り、全国人民代表大会・人民政治協商會議代議員(華僑代表)、僑聯幹部となったのは、主に陳嘉庚、『南僑日報』、『南僑晩報』、『風下』周辺の人物、それも自発的帰国組であること、第3に、こうした人々のなかで中共黨員はごくわずかで、中共に近い民主党派＝中国民主同盟の黨員がきわめて多いこと、である。

第1の点から検討しよう。これは、陳嘉庚の広大な人脈、マラヤ在住華人およびマラヤからの帰国華僑の多さ、戦前からの南洋の抗日援中運動でマラヤ華人が果たした中心的役割、などによるものであろう。

第2点。『風下』の中国指向についてはすでに詳しく触れた。華僑を代表して全国人民代表大会、人民政治協商會議代議員となり、また僑聯最高幹部ともなったのは、中国革命への支援・参加を使命とし、自らの意志で新中国建設に馳せ参じた人々だったと言ってよいだろう。

残念ながら『南僑日報』『南僑晩報』の論調は

当面調べられない。1949年から50年にかけて、両紙の論調がどれほどマラヤ指向に転じていたかは、マラヤ華人全般のマラヤ指向の強化と密接にかかわるきわめて興味深い問題だが、今はこれ以上立入ることはできない。ただ、その設立の経緯から見て、少なくとも中共政権樹立までは中国革命支援を第1の目標としていたことは否定できない。

他方、強制送還者はどうだったろうか。非常事態の宣言された1948年6月から53年2月までの間にイギリス当局の手でマラヤから追放された住民は2万4036人で、このうち90%以上が華人だった<sup>(注4)</sup>。追放者のほとんどは中国に戻るしかなかったろう。大規模な送還のために、マラヤからの帰国者は他に抜きん出ていたに違いない。ちなみに、1956年10月の全国帰国華僑聯合会設立大会での代表356人を「原僑居地」別に見ると、マラヤが90人で1位、次いでインドネシア85人、タイ26人の順だった<sup>(注5)</sup>。ところが、全国人民代表大会、人民政治協商会議、全国帰国華僑聯合会3機関のいずれかに登用されたマラヤ華僑のなかに、戦後の追放・送還者は洪糸糸しか見出せない。しかも洪は陳嘉庚に連なる『南僑日報』派の、革命後残留者の中心人物であり、マラヤの解放闘争とのつながりのゆえに追放されたとはみなし難い。マラヤ解放闘争への参加を理由に追放され新中国成立後3機関のいずれかに席を得たのは、1937年に中共から派遣されてマ共を指導し、翌38年に追放となった王炎之<sup>(注6)</sup>のみである。戦後の追放者で『南僑日報』などと関係のない「地下工作者」（恐らくはマ共党员）は、中国帰国後目立った地位についていないばかりか、その消息、生死すらつかめない。追放者は、その数の多さにもかかわらず、しかるべき職責を与えられなかったように思われる。

また、『風下』同人中のマラヤ指向派＝「馬華」、

陳仲達、周容らがどんな途を選んだのかも分らない。恐らくマラヤに残ったのであろう。その『風下』後の歩みに深い興味を覚える。

第3点。中国民主同盟が主体となったのは、恐らく共産党が前面に出れば海外華僑への工作が進められない、との配慮からであろう。また、華僑が通例、統一戦線の対象として民主党派と同列に置かれていることとも関係があろう。

以上から、次のような仮設が成り立つのではないか。すなわち、新中国樹立後の華僑政策を直接策定・実行したのは、ことマラヤに関する限り、政治的・心情的にはマラヤに仮住いしだけの中国指向派であった。彼らのマラヤ居住は期間も短く、10年以下が多かった。これに対し、マラヤでの政治闘争に加わって追放された華僑は、華僑政策策定に全く参画できなかった。

華僑政策の主目的が華僑保護よりも中国の国家建設に対する貢献にあった以上、これはある意味で当然の措置だったろう。このような状況のなかで策定・実行された華僑政策は、往々にして在外華僑（少なくともマラヤ華僑）の現実から遊離しがちになった。華僑政策がさして成果を収めぬまま文化大革命で潰滅させられたのは、その辺に一因があるのではないか。以上が当面の仮設である。

今日、全国帰国華僑聯合会成立時の指導者の多くが引退し、1984年の第3期役員は大幅に入れ替った。新役員中には、1950年前後に送還されたマラヤ華僑も相当数含まれていると思われるが、今は確かめる術はない。

（注1） 莊希泉「光輝旗幟耀千秋」（中国人民政治協商會議全國委員會・文史資料研究委員會他編『回憶陳嘉庚』北京 文史資料出版社 1984年）26～30ページ。

（注2） 莊明理「陳嘉庚与華僑機工」（同上書所収）111～120ページ。

(注3) 張楚琨『陳嘉庚与『南僑日報』』(同上書所収) 150~153ページ。

(注4) 林芳声『馬來亞』北京 世界知識社 1957年 103ページに引用されたマラヤ連邦立法議会での報告(1953年2月18日)。なお付表に見るように、林自身もマラヤからの帰国華僑である。

(注5) 中華全国帰国華僑聯合会編『中華全国帰国華僑聯合会成立大会特刊』北京 1957年 117ページ。

(注6) 拙稿「マラヤ共産党と抗日戦争」(『アジア経済』第19巻第8号 1978年8月) 8ページ参照。

## む す び

第2次大戦後、マラヤ華人は、中国国籍とマラヤ国籍のいずれを選ぶか、中国の革命運動とマラヤの自治獲得闘争のいずれを重視するかで、決断をつけかねていた。中国国籍のままマラヤの政治活動に参加したい、との意見が世論調査で98%を占めたこと、「非マレー人にもマレー人と同等のゆるやかな条件でマラヤ国籍を認める」とのマラヤ連合案が発表されても、支持する動きが見られなかったこと、などはその証左である。

『風下』は、このように流動的な状況、言い換えれば旧来の中国指向が華人一般の心に根強く残り、新たに生まれたマラヤ指向との間で内的葛藤が始まった状況のなかで、前者に依拠して発行されたものである。華人全般の動揺を反映して、編集長・胡愈之自身も「中国を祖国とするならマラヤの政治に参加する権利はない」、「永久家郷=永住地を祖国とせよ」、「マラヤの闘争に参加するのに中国と絶縁する必要はない」と相矛盾した主張を開陳したこともあったが、やはり『風下』の真骨頂、基本的論調は中国革命への支援・参加の懇願にあった。『風下』は当時のマラヤ華人に根強く残る中国指向に支えられたがゆえに存在し、また逆に華人のこの中国指向を維持・強化しようと

したのである。マラヤ華人にとっても、「強大な統一中国のみが海外華人を抑圧から守る」との中共派の呼びかけは説得力をもつものだったに違いない。しかし1947年後半からは、マラヤ連邦案をめぐって、マラヤにおける自らの生存権そのものがおびやかされ、華人全般が眼をマラヤに集中せざるを得なくなる。1948年6月の非常事態宣言は、左派華人に完全なマラヤ指向化を迫るものであった。こうして華人のマラヤ化が急速に進み、『風下』同人中にもマラヤ派が現われて胡愈之ら主流と感情的な対立すら引き起こすに到った。

胡愈之らが中国に帰ったのは、もちろん新中国建設に直接参画するためであったが、マラヤでの支持基盤を失いつつあったことも、隠れた理由の一つに挙げられるのではなからうか。

胡らの帰国と中共政権の成立とによって、マラヤ華人のマラヤ指向に一層拍車がかかった。統一中国実現を支援する必要性がなくなったこと、「衣錦還郷(故郷に錦を飾る)、榮宗耀祖(一族の名を高める)、落葉歸根(死して生地に帰る)」(注1)という華人の生涯の夢が実現困難になったこと、などの理由にもよるが、新たに策定された華僑政策が華人をひきつけ得なかったことにも原因はあろう。

非常事態下で中国に強制送還された2万人余の華人は、胡愈之ら『風下』『南僑日報』派と違って、マラヤ解放闘争に参加したマラヤ指向派であった。中国の華僑政策の立案、遂行に参画したのは胡ら中国指向派のみであり、マラヤ指向派は恐らくは意識的に排除された。このことが中国の華僑政策の有効性、現実性に微妙な影を落としたように思われてならないのである。

(注1) 吳沢主編『華僑史研究論集』上海 華東師範大学出版社 1984年 95ページ。

(アジア経済研究所調査研究部)

付表 マラヤからの帰国華僑

氏名	生年	原籍	初渡航年	居住地	事業・職業・関係機関	中国帰国年月	中国での地位	政党	没年
陳嘉庚	1874	福建	1890	S	ゴム・パイナップル関連企業 『南洋商報』『南僑日報』 アモイ大学	1950. 5 (42.2~45.10 インドネシア)	人代常務委(I, II) 政協常務委(I), 同副主席(II, III) 僑聯主席(I)		1961
莊希泉	1888	福建	1911 1946(再)	S	貿易商, 南洋女子中学 映画館	1921(追放) 1949.11	人代(I, II), 同常委(III, IV, V) 政協副主席(V, VI) 僑聯副主席(I), 主席(II), 名誉主席(III) 華僑委副主任('49, '64)	民盟 共産('82)	
莊明理	1911	福建	1938 1946(再)	P P	運輸会社 『現代日報』『商業日報』 民盟ベナン分会	1940(追放) 1949	人代(I~V) 政協常委(VI) 僑聯副主席(I, II, III)	民盟	
洪糸糸	1908	福建	1930頃	P S	『光華日報』『現代周刊』 『南僑晚報』『南僑日報』	1950. 9(追放)	人代(I, II, III, V), 同常委(VI) 僑聯常委(I), 同副主席(II, III) 華僑委('57, '64, '83)	民盟中委	
胡愈之 (胡学愚)	1896	浙江	1940	S	『南僑日報』『風下』 民盟南方総支部主任	1949. 1(42.2~ 45.9 スマトラ)	人代常委(I~V), 副委員長(VI) 政協(II~IV), 副主席(V)	民盟副主 席('83)	1986. 1.16.
沈茲九 (胡夫人)	1903	浙江	1940	S	『風下』『新婦女』	1948(42.2~45.9 スマトラ)	人代(I, II, III, V, VI) 政協(III) 僑聯常委(I, II)	民盟 共産('30)	
郭瑞人		福建	1930年 代末	S	アモイ公会, 『南僑日報』	1951	人代(III, V, VI) 僑聯(I), 副主席(II, III) 華僑委('57), アモイ副市長('60)		
邵宗漢	1921	江蘇	1940		『民主日報』(メダン)	(1942.2~? スマトラ)	人代(I) 政協(I)	民盟中委 ( '58) 顧問('83)	
張国基	1895	湖南	1919	S	教員	1922インドネシアへ 1958中国へ	人代(I~V) 僑聯(I), 常委(II), 主席(III)		
張楚琨		福建		S	『南洋商報』『南僑日報』 民盟S分会	1948末(42.2~45 スマトラ)	政協(III, VI) 僑聯常委(I, II), 顧問(III) アモイ副市長	民盟	
夏衍 (沈端先)	1900	浙江	1947	S	『南僑日報』	1949初	副文化相('54) 人代(I, II, III) 政協(I, V) 華僑委('57)	共産('27)	
方君壮	1907	広東		P	『現代日報』主編	(42.2~45スマトラ)	人代(I~V) 僑聯(I, II) 華僑委('59)		
盧心遠				S	『風下』		政協(II~VI) 僑聯常委(I, II, III) 華僑委('49)		
王紀元				S	『風下』	1952?(42.2~45 スマトラ)	政協(II, III, V, VI) 僑聯常委(I, II, III) 華僑委('56)		

氏名	生年	原籍	初渡航年	居住地	事業・職業・関係機関	中国帰国年月	中国での地位	政党	没年
王炎之		福建	1937	I, S	『中華農報』, マ共	1938(追放)	政協(Ⅲ, V) 僑聯(I, II)		
巴人 (王任叔)	1897	浙江	1941.8	S	教員, 『南洋商報』 『風下』 『前進週報』(メダン), 作家	1948 (42.2~47.10 スマトラ)	インドネシア大使('50) 華僑委 人民出版社々長('57)		1972
柯朝陽		福建		S	『南僑日報』 『新民主報』		政協(V, VI) 僑聯(I, II)	致公党	
張殊明				S	『風下』, 詩人	1949	僑聯常委(I, II, III) 華僑委('56)	民盟	
李鉄民		福建		S	陳嘉庚秘書	1950 (42.2~45.10 インドネシア)	僑聯副主席(I)	民盟	1956?
王瀛興				S	『南僑日報』	1950頃	人代(II) 僑聯常委(I)		1974
饒彭楓	1915	広東	1947	S	新華社支社 『風下』	1949頃	南方日報社長('49) 広東省政府秘書長('54)		
胡偉夫					『南僑日報』		広東省政協副秘書長('84)	民盟	
林芳声					『南僑晚報』		僑聯常委(II, III)		
吳柳斯				Se, S	教員, 『南僑日報』	1948(追放)(42~45 インドネシア)	羊城晚報經理('84)		
陸維持		福建		P			政協(VI)		
趙 瀛				S	『風下』		政協(VI), 僑聯(I) 文化省弁公庁主任('56)		
許 俠				S	『南僑日報』 『風下』		僑聯(II, III)		
侯西反					アジア保険公司副社長	1939(追放)		国民党	
彭友真				S	『南僑日報』	1950. 9(追放)			
吳西冷				Se, S	『南僑日報』, 詩人	1950. 9(追放)			
老 舍	1899	北京	1929	S	教員	1930	人代(I)		1966
張兆漢		福建	1947	S	文化工作	1949頃	政協福建省委('78)		
氷 清				S		1937(留学)	科学院		
胡守愚			1945頃	S	『風下』				
陳仲達				S	『南僑日報』 『風下』	(42.2~45スマトラ)			
高雲霓	1910	福建	1937	Mr, S	教員, 作家, 『南僑日報』	1949(追放) (42.2~45スマトラ)	作家		1956
馬 寧		福建	戦前 1945頃	M S	作家	1949(追放)			
楊 嘉		広東		S	作家, 『南僑日報』	1949(追放)			
漠 青				S	詩人, 『南僑日報』	1949頃			



氏名	生年	原籍	初渡航年	居住地	事業・職業・関係機関	中国帰国年月	中国での地位	政党	没年
楊 驛 (楊維銓)	1901	福建	1941	S	作家, 『獅声』 『閩潮』	1952 (42~?スマトラ)			1966
汪金丁		上海	戦前	S	教員, 作家, 『風下』	1949 (42.2~45スマトラ)			
蔡貞堅				S	作家				
王嘯平		福建			作家	戦前			
葉劍平				S	『晨星』	1946頃			
陳祖山					作家				
陳如旧		浙江	戦前		作家, 『新民主報』	1946(追放)			
夏懷霜 (梅金華)		広東	戦前		作家, 『前鋒報』 (地下工作)	1946(追放)			
馬蝶影					作家, 『民国日報』	1930年代(追放)			
謝呢喃		福建			作家, (地下工作)				
史 汀 (陳秋航)		広東			作家	1950			
石蘊真		広東			作家	1946頃			
王丹影					『南僑日報』	1948頃			
洪山兄		潮州	戦前		作家				1960

(出所) 『風下』各号; 中国人民政治協商会議全国委員会・文史資料研究委員会他編『回憶陳嘉庚』北京 文史資料出版社 1984年; 中華全国帰国華僑聯合会編『中華全国帰国華僑聯合会成立大会特刊』北京 1957年; 趙戒編著『新馬華文文芸辞典』シンガポール, 教育出版社 1979年; 李立明『中国現代600作家小伝』香港, 波文書局, 1977年; 『新中国人物誌』香港, 週末報社, 1950年; 張大軍編『中共人名典』香港, 自由出版社, 1956年; 『中共人名録』台北, 国立政治大学国際関係研究中心, 1978年; 陳碧笙・楊国楨『陳嘉庚伝』福建人民出版社他, 1982年; 巴人『印尼散記』長沙 湖南人民出版社 1984年; 胡愈之『郁達夫の流亡和失踪』シンガポール 咫園書屋 1946年; 『中華人民共和国第1届全国人民代表大会第1次会議文件』北京, 人民出版社, 1954年; 『僑務報』北京 僑務報社 1959年4月号; 『人民日報』1978年2月26, 28日, 12月29日, 1979年8月22日, 1983年5月8, 11日, 6月18, 19, 24日, 1984年4月12~17日; 『新華月報』1965年2月。

(注) 人代: 全国人民代表大会。 政協: 人民政治協商会議。 僑聯: 全国帰国華僑聯合会。 民盟: 中国民主同盟。 常委: 常務委員。 華僑委: 華僑事務委員会。 I~VIは第I~VI期を示す。

人代: 第I期 1954年9月(1226人中, 華僑代表30人), 第II期 1959年4月(1226人中, 華僑代表30人), 第III期 1964年12月~65年1月(3037人中, 華僑代表30人), 第IV期 1975年1月, 第V期 1978年2~3月(3497人中, 華僑35人), 第VI期 1983年6月(2978人中, 華僑35人)。

第III期までは「華僑代表」は別枠定員だが, 第IV期にこの枠はなくなり, 第V期からは各省・市代表に含まれるようになった。

政協: 第I期 1949年10月, 第II期 1954年12月, 第III期 1959年4月(1071人中, 華僑代表17人), 第IV期 1964年12月~65年1月, 第V期 1978年2~3月(1988人中, 華僑代表21人), 第VI期 1983年6月(2036人中, 華僑代表31人)。

僑聯: 第I期 1956年10月, 第II期 1978年12月, 第III期 1984年4月。

S: シンガポール, P: ペナン, Se: セランゴール, Mr: ムアール, M: マラヤ, I: イポー。 氏名欄のかっこ内は本名。